



むら さん が 邑滅びて山河あり

元 尾坂地区の紹介

網野町では過去に自治区が離村（消滅）された地区は「日和田区」「尾坂区」です。「日和田区」については離村後に転入された住民などがおられ少世帯数ですが自治区として再び復活していますので、過去の地区紹介をご参照ください。それで、今回は後者の「尾坂区」についてその歴史を中心に紹介したいと思います。

台風襲来、その時集落は大決断を迫られた

一つの集落（自治区）が消えていく・・・こんな状況が京丹後市の中にも過去、あったかと思いますが、近年においては道路などの整備にはじまり様々なインフラ整備が続き、あまりそのような事態は起きていません。このホームページを見て頂いている皆さんは、ネットなどの地図を見た時、網野町北東部の山間地（標高 220 メートルの山裾）に「尾坂」という地区名（集落）の掲載を見かけたことがあると思います。しかし、この集落は現在ありません。古い話で網野町が昭和 25 年合併時にはまだこの集落には人々が住み、生活をしていましたが、その 10 年後に集落の世帯全員は約千年の歴史を有する村を後にし、山を下りたのです。誰しも理由は、一般的には「38 豪雪」を連想しますが、起因は昭和 34 年秋の「伊勢湾台風」による道路の甚大な損壊だったと話されます。集落で賛否の意見が続く協議の後（1 年余）大きな決断をされたのでした。

・間人の城島を庭先から絶えず眺めて、遠く下界にたなびく風の良い海に行くのが楽しみだった・・・三津の村に下りる時は、必ず手ぶらでは下りずバラ木 4～5 束セッタに背負って売りに行くのでした。――（70 代女性のお方の話）

楽しみだったこと

・昭和 36 年 3 月まで私たちは山道 3 K 程離れた三津小学校へ通いました。7、8 歳の児童にとって大変な通学でした。ある冬の日、雪道を一人で小学校から下校の途中、ふっと疲れて雪の上に倒れたあと意識がなくなり眠ってしまいました。通りがかりの大人の人に助けてもらいました。もし通る人が居なかったら私はこの世にいなかったかも知れない・・・と還暦を迎えた女性が話されます。

怖かったこと



尾坂の集落がいつの時代にか
いかなる事情によって
営み始められたかというのは全く分からない

昭和 36 年春、住民の人々（7 世帯）は千年の古里を離れ、自力でそれぞれ安住の地を求めて、丹後町、網野町へと転出されました。現在、網野町内で「真柴姓」「沖佐々木姓」を名乗っている方たちはこの尾坂集落のご関係者と考えてまずは間違いないかと思っています。しかしながら、なぜこのような海岸域（丹後町砂方、網野町三津）にそれほど遠くない人里離れた山の中腹に住んでいたのか、その解説は歴史家にまかせたいと思います。

尾坂地区ご出身の 60 歳以上の方ならこの集落から各小中学校に通学されたかと思いますが、その頃今のような熊が出たとか鹿が横切ったとかそんな話はほとんど聞きませんでした。必ず通学時には交代で大人が先導したとか、また寒い積雪の冬には大人たちが先に歩き、その足で新雪を踏み固めながら児童たちの歩く道を確保したと云います。

ここ尾坂は千年の歴史を閉じ、全戸別里したが、和と繁栄は我々が一同の願望である

※昭和 56 年暮れ 集落跡に建立された記念碑に刻まれた言葉である

・三津小学校では、尾坂の生徒たちが冬の積雪や風雪が厳しい朝は、遅刻して来ても校舎に近づくと先生や生徒たちが窓から手を振ってくれ、教室に入ると一番前に用意されたストーブのそばの席に座り、濡れたズボンや服を乾かした。また、そんな悪天候の日他地区の生徒たちより、早く下校させてもらった思い出がある

真冬の登校では

尾坂には今住む人愈々田畑は荒れるに任せ屋敷跡は雑草に覆われ、丈余に伸びた杉や桧が思うままに枝を蔓延させ年ごとに私どもの先祖が入植した頃に帰ろうとして居る。私共は時にこの私共の古里に立ち戻り自然遂行の輪廻を想い感無量然然頭を垂れるのみである。

「尾坂村 村誌」より

元尾坂集落の位置

この辺りが尾坂集落のあった位置かと思います

網野最終処分場

遊方面

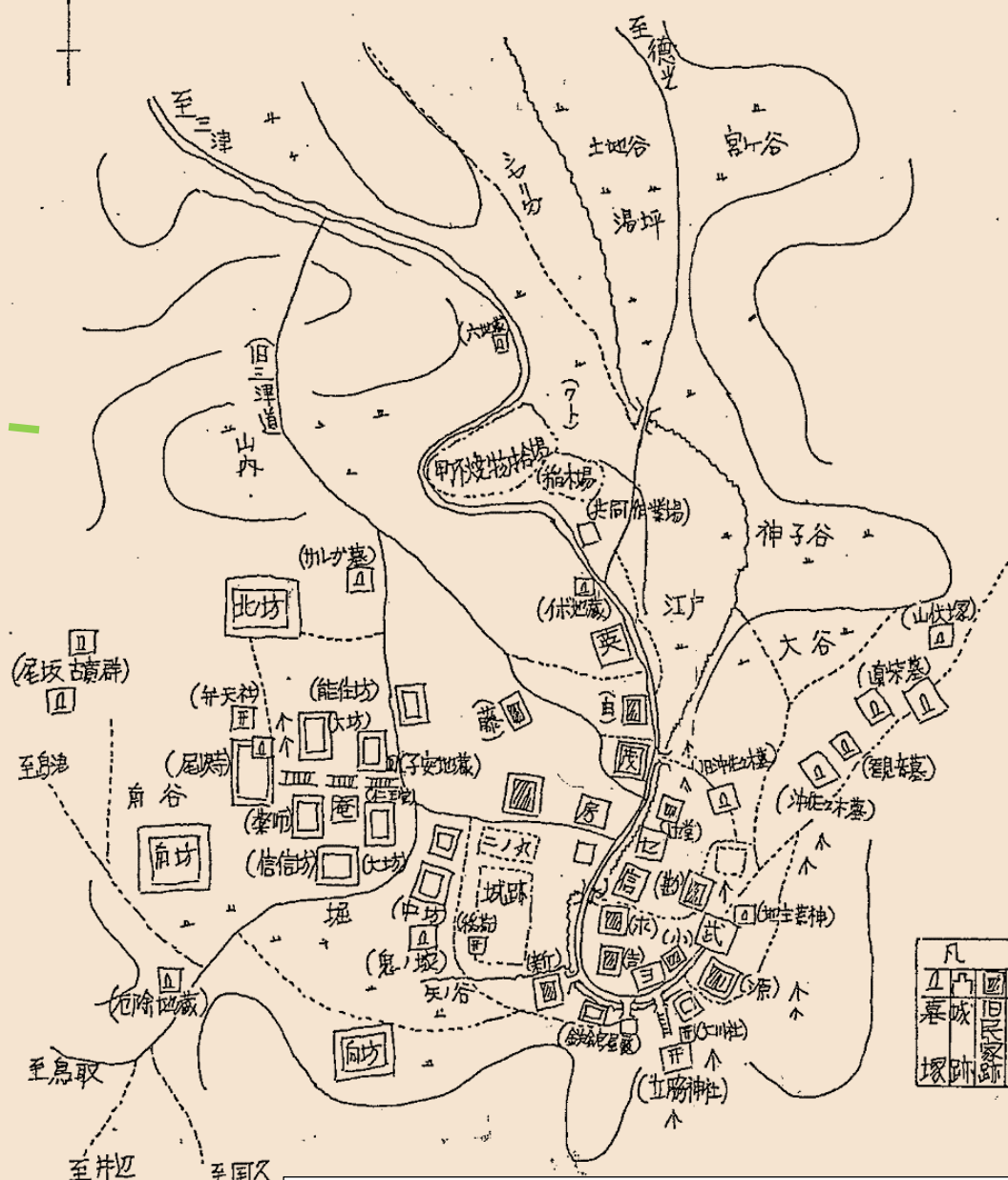
府道分岐点

徳光方面

三津国営農地

標高 200 メートル余の徳楽山頂より
尾坂集落跡の位置を確認する

尾坂見取図 (昭和40)



かつての尾坂集落内の地図です

千年もの長い間・・10 戸余りの世帯が暮らしていたといいますが、世帯（分家）を増やさなかったのはその地勢を見ても、資源（田畑）に限界があったのではと容易に推測できます。それにしてもこのような厳しい自然山中で永年生活されて来たことは、世の中の流れ（自給経済から消費経済）に飲み込まれず、集落が和を大事にしてきた賜物であると確信できるところです。そのような理由であるのか、尾坂地区のご出身の方々に共通するのは穏やかで温かな方が、しかも勤勉であるご子孫が多いように見受けられます。そして尾坂では誰もがその村のリーダーにならねばという強い自覚があり、優秀な人材を輩出できたのではと感ずるところです。そのためか、他集落の一部に出られた方で同じような構えで主張するあまり、思わぬしっぺ返しを味わったというお方の苦労話を直接聞いたことがあります。集落の人々がこのような山中に、何処から来たのか不思議であるという話はご出身者の是非を問わずよく聞きます。上の図にある寺の門のような跡がたくさんあり、何か意味の深い由来の寺であったのではと空想を漂わせてしまいます。ご出身の方にその辺りのことを尋ねると・・「一説による元々の住民が川下から移り住んだということより、落人説の方が考えやすい。そして、この山を守らなければならない特別の事情（宗教的な何かを）を背負っていたのではと推測する」と話されます。

石碑に刻まれた言葉を読むとき、きびしい自然の中で生きて来たからゆえに、人々は和を重んじその和を鉄壁として集落に掛る様々な難事と、永きにわたり闘って来られたのだと思われま

参考文献 沖佐々木英志・真柴隆義氏編集「尾坂村誌」

集落尾坂の関係者を訪ねて紹介した内容がほとんどです。また当時の集落の写真を一枚も所有されていないということが大変残念であり、紙面に載せることが出来ませんでした。ご了承ください。